

語・発話・思念

—ヨハン・マッテゾンにおける「情動」と「言葉」

岡野宏 (東京大学)

本発表ではヨハン・マッテゾン (Johann, Mattheson 1681~1764) の論説において、テキストにどのように「情動」が付随すると考えられているかを検討する。マッテゾンは18世紀前半から半ばにかけて活躍したハンブルクの音楽家・著作家である。当時の一般的見解としても彼自身の見解としてもそうであるが、音楽の主要な目的は情動の表現とそれによる聴き手の内部での情動の喚起とされていた。さらに、一般的にはテキストによる概念的な支えを伴った声楽曲のほうが器楽曲より一層、情動表現には適していると考えられていた。

この点に関していえば、マッテゾンはやや微妙な立場にいるといえる。彼は器楽にも声楽と同様の表現能力を認めている。しかし、後のロマン主義者のように器楽固有の表現能力を認めているわけではない。簡単な図式化を拒み、多角的に考察することを要求するマッテゾンの思想について発表者は幾度か発表の機会を持ってきたが、本発表ではテキストに内在する情動の問題を扱いたい。

マッテゾンがテキスト中における情動について詳述している文章はそう多いわけではないが、本発表では主に『クリティカ・ムシカ critica musica』(1722~1725) 第八部「旋律の前庭」において示された主張を、磯山雅氏による論考(1988)を導きの糸としつつ考察したい。この文章はボーケマイヤーという同時代の音楽家による同名の文章に対する注釈として執筆されたものであるが、多くの彼の著作同様、論争的な性格をもっている。

論考の内容は大きく二つに分かれる。最初にテキストとそれに付曲される音楽の関係、次にテキストの反復が扱われる。まずマッテゾンは声楽曲において、テキストが主か音楽が主か、という問題に焦点をあてる。ボーケマイヤーによれば、これはテキストが主であり、音楽はそのコピーということになる。これに対し、マッテゾンはテキストも音楽もいずれもオリジナルであり、かついずれも原像たる思念 *Gedancke* のコピーであると考えた。ここに示された思念を重視する姿勢は、情動の問題に関しては、情動が語 *Wort* に帰属するのではなく、思念が表明されているところの発話 *Rede* 全体にこそ帰属するという考えを導いた。その上で、ではテキストの一部を取り出す形で行われる反復において、—これは声楽曲において頻繁に現れてくるものであるが—発話全体に行き渡っているはずの思念とそこに付随する情動はどのような運命をたどるのか。発表では、従来の研究ではあまり詳細に考察されてはこなかったこの点を、キータームである *sensus rhetoricus* などの語彙にも留意しながら検討していきたい。